

キー・コンピテンシーを育てる指導の工夫①

北区教育委員会研究指定校 北区立赤羽台西小学校 研究発表会 11月12日(金)

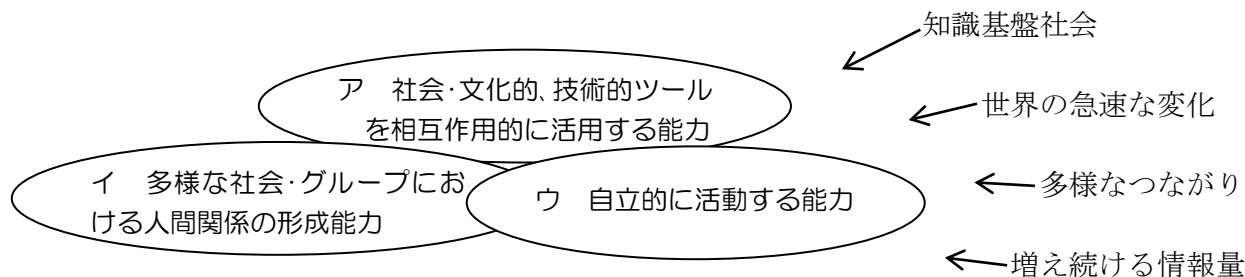
流行言葉につられて、研究発表会に行ってきました。キー・コンピテンシー＝個人が身に付けるべき鍵となる能力(主要能力、必要不可欠な能力)ということですが、知っておいて損はないと思います。また、本研究のキーワードは「協同的な学び」と「コミュニケーション能力の育成」にあり、本校としても大いに参考になると思います。

北区教育委員会 教育長 伊与部輝雄 氏 あいさつより

(省略) さて、キー・コンピテンシーとは、経済協力開発機構(OECD)が、「知識基盤社会」の時代を担う子供たちに必要な能力を「主要能力(キー・コンピテンシー)」として、平成12年から開始したPISA調査の概念的な枠組みとして定義付けたものであります。具体的には、「社会・文化的、技術的ツールを相互作用的に活用する力」「多様な社会グループにおける人間関係形成能力」「自律的に行動する能力」という3つのカテゴリーで構成されております。

北区立赤羽台西小学校では、この3つの能力を踏まえ、それぞれ「ツールとの対話」「他者との対話」「自己との対話」に焦点を当て、研究を進めてこられました。さらには、「協同的な学び」を支える言語力、特にコミュニケーション能力の育成という視点を加えて、3年間にわたり研究を深めてこられました。(省略)

《キー・コンピテンシーの3つのカテゴリー》 研究紀要より



ア 社会・文化的、技術的ツールを相互作用的に活用する能力

- ① 言語、テキスト、図などを相互作用的に用いる能力
- ② 知識や情報を相互作用的に用いる能力
- ③ 技術を相互作用的に用いる能力

個人が様々なツールを相互作用的に、または目的に適応させて活用できるように、ツールをよく理解し活用する経験を重ねていくことが大切である。

イ 多様な社会・グループにおける人間関係の形成能力

- ① 他者とうまくかわる能力
- ② 協力する能力
- ③ 対立を処理し解決する能力

一層の協力が必要とされている世界にあって、いろいろな経歴をもった人々とよりよい交流ができるようにすることが大切である。

ウ 自律的に活動する能力

- ① 大きな展望(グローバル)の中で活動する能力
- ② 人生計画や個人プロジェクトを設計し実行する能力
- ③ 自らの権利、利害、限界やニーズを表明する能力

自分の生活や人生に責任をもち、社会の一員として自律的に活動することが大切である。

キー・コンピテンシーを育てる指導の工夫②

北区教育委員会研究指定校 北区立赤羽台西小学校 研究発表会 11月12日(金)

研究紀要より

授業の実態に合わせるために、それぞれのキー・コンピテンシーを育成すると考えられる3つの対話に視点を置き換え、さらに「協同的な学び」を支える言語力を研究の視点に加えている。

<OECDのキー・コンピテンシー>

<研究の視点>

ア 社会・文化的、技術的ツールを
相互作用的に活用する能力



ツールとの対話

ツールとは、教材などの情報や教具等を指し、そのツールを読んだり、見たり、使ったり、行為したりすることで、分かることや新たな課題を見い出すことが対話である。対話することが可能となる教材、教具をどのように準備し、どの場面で子供と出会わせるかということを考えていこうという視点である。様々なツール(教材文、資料、図絵、教具、道具など)と向き合い、それらのツールと対話することを通して学ぶための指導の工夫を模索してきた。

イ 多様な社会・グループにおけ
る人間関係の形成能力



他者との対話

友達や教師、ゲストティーチャーなどの他者と対話することにより、自分の考えや思いに気付いたり、考えが広がったり、深まったりしながら学ぶことを目指して。他者との対話をどの場面で、どのような形態で取り入れ、思考を深めていくのかということを考えていこうとする視点である。一緒に学ぶやゲストティーチャー、教師との対話を通して学ぶための指導の工夫を模索してきた。自立的に活動する能力

ウ 自立的に活動する能力



自己との対話

すべての対話の中で行われる対話である。例えば「ツールとの対話」では、「そうか、○○ってことだ。」と気づき、「他者との対話」では「でも、私は○○だと思う。」と自分の考えを確認し、終末には、「○○だということがわかった。」「だから私は○○していきたい。」などと自分の考えをまとめる活動も「自己との対話」である。発達の段階を考慮し、どこで、どのように自分と向き合わせていくかを考えていこうとする視点である。ツールや他者との対話を通して、あるいは、自分と向き合うことを通して、自分の考えに気づき、自立的に活動する能力をはぐくむための指導の工夫を模索してきた。

ウ 言語力(コミュニケーション能力)

言語力の中でも特にコミュニケーション能力という観点で、発話分析を基に、教師の発話と言語力の育成の関係について、考察していきたいと考えた。

特に今年度は、大学の協力を得て、テキスト・マイニングによる分析を取り入れ、協同性の高い授業における発話の特徴について分析・検討を重ねてきた。



左上：4年 算数

上：1年 国語

左：5年 国語

キー・コンピテンシーを育てる指導の工夫③

北区教育委員会研究指定校 北区立赤羽台西小学校 研究発表会 11月12日(金)

東京大学大学院教授 佐藤学 先生

ご存じの方も多いかと思いますが、学校カリキュラム改革の研究、「学び」の研究、教師の同僚性の研究などで知られています。

「学び」は、モノ(対象世界)との出会いと対話による「活動(action)」、他者との出会いと対話による「協同(collaboration)」、自分自身との出会いと対話による「反省(reflection)」が三位一体となって遂行される「意味と関係の編み直し(re-contextualization)」の永続的な過程として定義しています。

また、「学び」を核とした学校改革の理念として「学びの共同体」を提唱し、具体的な方法としては、**授業改革、授業検討会、保護者や市民の学習参加の三つを、上記の「学び」の定義に従って展開することを提案**しています。



講演より

東京都の教育の課題 教員の授業がひどすぎる 子供も大変 学力が伸びるはずがない

本日の授業の課題

- (1) 学び合いの場はあったが、協同的な学びとまで言えない。小グループの学び合いが弱い。
位置づけを明確に 「全体の学び合い」のための、「小グループの学び合い」
「小グループの学び合い」のための、「全体の学び合い」
- (2) 教えている内容・課題が優しすぎる。
優しい内容を、最後までグルングルンやっている。←日本の教育の最大の間違い！
授業には、2つのレベルがある。

教科書レベル	両方が必要
ジャンプレベル	

いくら基礎を繰り返しても、教員がくどくど話しても、できない子には分らない。
⇒ **できない子が分かる瞬間：ジャンプの学習をした時。発展から基礎に気づく。**

これからの授業の課題

- (1) 学びは、背伸びとジャンプである。
日本の授業は、ダイナミックスさに欠けている。
ほとんどの子にとって分かり切ったことは、はじめから興味を惹かない。
分かっていることを、あの手この手で終始 → 教員の自己満足に過ぎない
- (2) オーセンティックな学びが必要である。
教員は、その教科の本質を分かっているか。
国語には国語の、算数には算数の学びがある。教員には、教科のセンスと教養が必要。
教科書しか教えられない教員
⇒ **一つの単元で、一冊でいいから関係した本を読むこと。→学びが分かる、深まる**
- (3) 授業は量より質の時代である。
日本は逆行の道へ。授業時数、指導内容の増加は、まったくダメ。
PISA調査の結果、授業時数と学力は反比例しているのに…
⇒ **学校を専門家の共同体とすること。プロフェッショナルコミュニティ。**